名古屋芸術大学キャリアセンター紀要　第9号　125〜140頁（2020）

小学校「外国語」科における絵本利用法の提案：フォニックスの観点から

Utelizing Picturebooks in "Foreign Language (English)" Classes in Elementary School: An Attempt to Teach Phonics through Picturebooks

早川　知江　*HAYAKAWA Chie*

0. はじめに

本稿は、小学校「外国語」科の授業において、児童が初めて英語の読み書きを学ぶ教材として絵本を取り入れる場合の、適切な絵本の選定法・利用法を提案する研究の一環である。特に本稿では、英語の読み書き指導法としてフォニックス理論を参考にする（フォニックス phonicsに関しての詳細は第1.3節参照）。フォニックスとは、綴りと発音間の規則性を教えることで学習者の読み書き能力を向上させる方法論である。本稿の目的は、フォニックス理論に基づいて特別に作成された教材絵本を用いなくても、市販の英語絵本を用いてフォニックス教育を行う方法論・枠組みを提案することである。

この研究を行う背景は、2020年度から新小学校学習指導要領が実施されるのに伴い、小学校5-6年生で新たに「外国語」が教科化されることである。その指導内容上の最大の変化は、今まで「外国語活動」では扱われてこなかった英語の読み書きが導入されることである。しかし、日本語と根本的に構造の異なる英語の読み書きは、英語を初めて学ぶ児童には戸惑いが多い（第1.2節参照）。本稿は、楽しいストーリーや鮮やかな絵によって児童を惹きつける絵本を教材として活用することで、この英語読み書き学習への第一歩を、児童にとってより楽しい、心理的ハードルの低い活動にできないか提案する。

第1節は研究の背景説明である。まず、従来の「外国語活動」と新しく始まる「外国語」がどう異なるかまとめる。次に、新しく導入される英語の読み書きに関し、日本人児童が特に躓きがちな点を指摘する。最後に、それらの躓きを克服する可能性をもった指導理論として、フォニックス理論を紹介する。

第2節は既に出版されている教材の分析である。フォニックス理論に基づいて作成された教材絵本2点を、音声学的、内容的に分析することで、それらの利点と問題点の両面を明らかにする。そこから導き出されるのは、「フォニックスに特化した教材は、綴りと音の関係を教えるのに適した単語を厳選して使用し、読み書き指導には適している。一方で、内容的にストーリー性に欠け、児童が知的好奇心をもって楽しく学習することが難しい」という課題である。

第3節は提案部で、第2節で明らかになった課題を克服するため、教材ではない市販の絵本を読み書き教材として取り入れることを提案する。その際、絵本全体を読み書き訓練に用いるのではなく、全体のストーリーを楽しみつつ、本文の一部分のみをフォニックス指導に用いるという、組み合わせ指導法を提案する。その際、どのような部分を選ぶと効

果的に、かつ児童の負担を少なくして教育が行えるか、その選定基準や、実際の教授法を提案する。

1．研究の背景

1.1　2020年度実施の新小学校学習指導要領：読み書きの導入

小学校外国語学習で初めて読み書きが扱われるようになることに関し、その背景を理解するため、新小学校学習指導要領（文部科学省、2017年3月告示、2020年度実施）の記述をまとめる。

2011年度から全ての公立小学校で必修で行われてきた「外国語活動」は、実施学年が5-6年生から3-4年生へとスライドし、年間授業時間は従来通り35単位時間（1単位時間45分）である。その目標は「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成する（強調は早川による）」ことである。すなわち「外国語活動」の時点では、まだ文字は扱われない（例外として、アルファベットの名称を覚える活動は行われる）。扱う言語領域も、「聞くこと・話すこと［やり取り］・話すこと［発表］」のみと記されている。

一方、教科である「外国語」は、実施学年を5-6年生とし、年間授業時間は70単位時間である。「外国語活動」の35単位時間が週1コマの実施を目安とするのに対し、「外国語」は週2コマ相当となる。その目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する（強調は早川による）」とされており、この時点から読み書き指導が導入されることが明示されている。扱う言語領域としても、「聞くこと・読むこと・話すこと[やり取り]・話すこと[発表]・書くこと」、すなわち4技能のすべてが含まれる。

このように、「外国語」ではじめて児童が学ぶことになる英語の読み書きについて、その学習をスムーズにするのが本稿の狙いである。

1.2　日本人児童が抱える英語読み書きの困難

「外国語活動」は、まず音声で英語に慣れ親しむことを目指していた。そのため文字はほとんど扱われず、アルファベットの名称読み（ABCを /eɪ/ /biː/ /siː/ と読む読み方；「名前読み」とも呼ばれる）のみができればよいなど、読み書きに対して消極的な姿勢がとられてきた。しかしもちろん、読み書きは学習の根幹をなす能力である。子どもたちは、教科書はもちろん、身の回りに溢れる文字から多くの情報を得て学習する。また、学習したことは文字で残せるからこそ定着するのであり、体験は記録によって積み重ねることで、はじめて体系的な知識へとまとめ上げられる。文部科学省が行った調査で、これまでの「外

国語活動」に対して「体系的な学習を行わないので、児童が学習内容に物足りなさを感じている」ことが指摘された（文部科学省 2014）のも、読み書き指導の不足が原因の一つといえるだろう。自分が学んだことをノートに文字で残しておけないと、児童は「楽しいだけで、何も身についた気がしない」と感じてしまうからだ。

このように教育に重要な意味をもつ読み書きだが、はじめて外国語の文字に触れることは、日本語で育ってきた児童に思いがけない困難や負担を引き起こす。その第一の原因は、日本語の仮名は読みが１文字につき１種類しかない（例：「か」は常に /ka/ という音節に対応）が、英語のアルファベットでは２種類以上存在することである。中学校の教諭として長年英語教育に携わってきて、学習参考書なども多く執筆している手嶋は、英語の読み書きに初めて触れた生徒の反応として、以下のような興味深いエピソードを紹介している（2008 年公示、2011 年度実施の小学校学習指導要領より以前は、原則として中学校で初めて英語教育が開始されていた）：

> 生徒が困惑するのは、英語の文字は、語の中に入ったとたん、原則的に、「文字の名前（文字名）では読まなくなる」ということです。a から z まで文字の名前を覚えて、「よーし、これで英単語が読めるようになったぞ！」と思っている生徒にとって、desk を「ディー・イー・エス・ケイ」とは読まない、という事実はかなり衝撃的です。というのも、日本語では「あ」から「ん」までの「文字」１つひとつが読めるようになれば「つくえ」「いす」という「語」は読めるようになるのですから。（手嶋 2019:90）

こうした「衝撃」を引き起こす根本が、英語のアルファベットにおける「名称読み（手嶋は「文字の名前」と表現）」と「音読み」の区別である。名称読みとは、本節冒頭で述べたように、ABC を /eɪ/ /biː/ /siː/ と読む読み方で、cakeにおける a はこの読みである。音読みは、ABC を /æ/ /b/ /k/ と読む読み方で、appleにおける a はこの読みである。このように、アルファベットでは全ての文字が最低この２種類の読みをもち、同じ文字を場合によって読み分けなければならない。また文字と文字が繋がると別の読み方になる場合（例：th が / θ / や /ð/ の音になる）や、１つの文字が複数の音読みを持つ場合（例：c は、cake の中では /k/ の音を、ceiling の中では /s/ の音を表す）もある。こうしたアルファベット特有の複雑さが、仮名に慣れている日本の児童に戸惑いをもたらす要因の１つとなっている。

また別の要因として、日本語では必ず「子音＋母音」を１単位として発音し、それに仮名１文字が割り振られるため、子音だけ読む経験がないという違いも指摘できる。日本語の「カキクケコ」は、ローマ字で ka ki ku ke ko と表記すると分かりやすいが、実際には「カ」で１音ではなく、子音 /k/ に 母音 /a/ が続いた２音である（/a/ は日本語の「ア」の音を表す国際音声記号）。同様に、「キ」は /k/ に /i/ が、「ク」は /k/ に /ɯ/ が続いた

音である。このように、日本語においては /k/ という子音を単独で発音する機会はなく、必ず何らかの母音を伴う。日本人にとっては、この「子音＋母音のセット」が基本の発音の単位として分かち難い「1 音」と認識されており（1 文字の仮名で表記されることもこの誤解に拍車をかけている)、/k/ という子音は「音」として意識されない。そのため、英語のように子音が連続したり、単語が子音で終わったりする音構造は大変に馴染みにくく、存在しないはずの母音をつい挿入し、cake を /keɪk/ ではなく /keiki/ または /ke:ki/ と発音してしまう。

このように、英語初学者にとっては様々な困難を伴う読み書きだが、英語の音構造にある程度習熟している教員の側は、自分が初めて英語の文字に触れた時に感じた（はず）のこれらの困難をすでに忘れているため、留意を怠りがちになる。初期の英語の読み書き指導では、アルファベットの名称読みと音読み、これらの発音に基づく書きの指導が重要になってくるが、こうした困難を抱えた日本人児童にはどのような学習法が効果的だろうか。次節、フォニックス理論にその解決法を探る。

1.3　フォニックス（phonics）理論とは

前節で見たような読み書き指導には、フォニックスの考え方が重要かつ有用と考えらえる。フォニックスとは、ひとことで言えば「文字と音の関係を教えて、正しく「読み書き」ができるようにする指導法」(田中 2017:25）である。英語には「このように綴るとこのように発音する」という（暗黙の）ルールが数多く存在するが、それを明示化して教えるのがフォニックスである。フォニックスの初期の教育は、もちろんアルファベット 1 文字 1 文字とその音を結びつけ、それらの名称読みと音読みを習得することにある。以下に、アルファベット 26 文字とその読みの一覧を表 1 として示す：

表 1：アルファベットの名称読みと音読み（音読みは代表的な発音のみ）：発音記号表記

	a	b	c	d	e	f	g	h	i
名称読み	eɪ	bi:	si:	di:	i:	ɛf	dʒi:	eɪtʃ	aɪ
音 読 み	æ	b	k, s	d	ɛ	f	g	h	ɪ
	j	k	l	m	n	o	p	q	r
名称読み	dʒeɪ	keɪ	ɛl	ɛm	ɛn	oʊ	pi:	kju:	ɑ:r
音 読 み	dʒ	k	l	m	n	ɑ	p	kw	r
	s	t	u	v	w	x	y	z	
名称読み	ɛs	ti:	ju:	vi:	dʌblju:	ɛks	waɪ	zi:	
音 読 み	s, z	t	ʌ	v	w	ks	(語頭)j (語尾)ɪ	z	

表 1 が示すように、全ての文字において名称読みと音読みは異なることが分かる。この

ことを最初に明確に示すことが、混乱のない学びの第一歩である。なお日本人児童には、表１のような発音記号表記よりも、表２のようなカタカタ表記の方が馴染みやすいかもしれない。しかし表２を用いる際も、教員が実際に正しい発音を聞かせ、カタカナでは英語の発音は正確に表せないことを充分に理解させる必要がある（例えば、a, o, uの音読みはすべて「ア」と示されているが、これらは全て異なる音で、実際にはそれぞれ /æ/ /ɑ/ /ʌ/ となる）。

表２：アルファベットの名称読みと音読み（音読みは代表的な発音のみ）：カタカナ表記

	a	b	c	d	e	f	g	h	i
名称読み	エイ	ビー	スィー	ディー	イー	エフ	ジー	エイチ	アイ
音 読 み	ア	ブ	ク、ス	ドゥ	エ	フ	グ	ハ	イ
	j	k	l	m	n	o	p	q	r
名称読み	ジェイ	ケイ	エル	エンム	エンヌ	オウ	ピー	キュー	アール
音 読 み	ジ	ク	ル	ム	ヌ	ア	パ	ク	ゥル
	s	t	u	v	w	x	y	z	
名称読み	エス	ティー	ユー	ヴィー	ダブリュー	エクス	ワイ	ズィー	
音 読 み	ス、ズ	トゥ	ア	ヴ	ウォ	クス	(語頭)ユ (語尾)イ	ズ	

こうした表を習得し、かつ「単語の中ではアルファベットは音読みで読む」ことを学べば、deskを「ディー・イー・エス・ケイ」と読むことはなくなり、「ドゥ・エ・ス・ク…デスク」と発音できるようになるだろう。

しかしフォニックスはもちろん、上記の表を丸暗記しただけでは終わらない。最初の難関は母音の発音で、母音字は単語の中でも名称読みする場合がある。つまり、１文字が複数の読みと結びついている母音を習得するには、aに名称読みと音読みがあることだけでなく、aの文字が単語のどこに現れるとどちらの読みになるかという知識も必要となる。

したがって、母音の発音と綴りの関係を学ぶのが、フォニックスの次の段階になる。ここでは、小学校児童に導入するにふさわしい基礎的なルールに限って紹介する。母音の発音は原則、その母音が現れる音節が閉音節（母音の後に子音が続く音節）か開音節（母音で終わる音節）かによって決まる（ただし児童にこれらの音声学的用語を導入する必要は必ずしもない）。以下に概要をまとめる（二重母音については、複雑化を避けるため本稿では議論の対象から省いた）：

- 閉音節は母音１文字に子音が続く音節で、その母音は音読みとなる。例えばcatは閉音節のため、aを音読みの /æ/ で発音する。
- 開音節は母音で終わる音節で、その母音は名称読みとなる。例えばheは開音節の

ため、eを名称読みの /iː/ で発音する。

・ 閉音節の最後にeがつくと、そのe（＝マジックe）自体は母音として発音されないが、音節中の母音が名称読みとなる。例えば、themは閉音節で /ðɛm/ だが、末尾にeがついたthemeは /θiːm/ と発音される。

上記がフォニックスにおける母音の発音と音節の関係の基本的なルールである。小学校児童に最低限導入したい基礎的なルールに絞って紹介したが、ここに挙げただけでもかなり複雑で、児童が習得するには、順を追って丁寧に導入する必要があることが分かるだろう。しかし本稿の基本的な方針として、ルールというのは、たとえ複雑であっても、覚えた方が負担が少なく、発音の習得が早まると考える。というのも、まったくルールなしに英語の発音を覚えようと思ったら、児童はすべての単語について、その発音を１つ１つ訳も分からずに暗記しなければならない。小学校でも600-700語覚えることが求められる単語（新小学校学習指導要領 第10節「外国語」第2「各言語の目標及び内容等」参照）すべての発音を丸暗記することに比べたら、それらを一括して説明するルールを覚えた方が、よほど覚えることの数は少ないからである。

２．教材絵本分析

フォニックスの指導法に基づき、既にいくつかの教材絵本が提案され、使用されている。市販の絵本を用いた教授法の参考にするため、まずはこれらの教材絵本でどのような工夫がなされているか見てみたい。ここでは、田中（2017）の実験的絵本『キツネとカエル』(*Fox and Frog*)、ジョリーラーニング社（2017）の『はじめてのジョリーフォニックス』を教材絵本のサンプルとして取り上げる。この２冊を音声学的・言語学的に分析することで、教材として見た場合の特徴と適切性を見ていく。

2.1　教材の概要

田中（2017）は、フォニックスの考えに基づき、「外国語」科目で文字と音の関係を教えるのに適した絵本教材を独自に考案・提案している。そのうち、fの音 /f/ を身につけるための作品例として示されているのが『キツネとカエル』(*Fox and Frog*)（田中 2017:139）である。以下に作品本文を引用する（本文行頭の数字は行数（早川による補足））：

Fox and Frog

Written by Makiko Tanaka. Illustrated by Sina Takada.

1. This is Frank. Frank is a fox. He is very furry.
2. This is Ferris. Ferris is a frog. He is very funny.
3. Frank and Ferris live in the forest.

4. Frank is hungry. He wants to eat a fish.
5. Ferris is hungry, too. He wants to eat a fly.
6. Frank and Ferris are full.
7. They want to have fun now. Let's have fun together.

田中は、単に絵本を提案するのみでなく、それを教室で用いるときの指導の手順・留意点についても詳しく提案している。例えば、「Ffがつく単語は、例えば“/f/ /f/ fox”とfの音に注意させ、また“/εf/ /f/ fox”と、名前読みと音読みをセットにして読み、「f (/εf/) は /f/ と読む」ということに注目させる」（田中 2017: 138）などと記している。

もう１つの教材は、ジョリーラーニング社（2017）の『はじめてのジョリーフォニックス』である。ジョリーラーニング社（Jolly Learning Ltd.）は、イギリスに本社のある、英語の読み書き指導教材を中心に扱う教材出版社である。ジョリーフォニックスシリーズは、学習者のレベルに合わせ 1, 2, 3 があり、それぞれが学習者向けのワークブックであるスチューデントブックと、指導者用マニュアルであるティーチャーズブックから成る。『はじめてのジョリーフォニックス』は、英語版*Jolly Phonics* 1 の日本語版であり、英語の読み書きを学ぶ日本人が最初に取り組むべき入門書として位置づけられている。

全体が絵本形式を取っているわけではない。構成としては、１ページでアルファベット１文字を扱うが、実際には「文字」ではなく「音」を単位としているため、「sのページ」「bのページ」と並んで、２字で１音の「ch（音としては /tʃ/）のページ」、母音を扱う「a（音としては /æ/）のページ」などもある。このようにジョリーフォニックスは、綴りとその典型的な発音を１つに結びつけることを目指している。そのため文字は「音を表す記号」として用いられ、/æ/ は「aの音」と表記される。この方針は、『はじめてのジョリーフォニックス』ティーチャーズブックでも明言されている：

> 子供に英語の読み書きを教える最初の段階では、文字の音だけを使います。文字の名前（エー、ビー、シー…）を文字の音と同時に教えると、混乱する子供が少なくありません。このため、本書のレッスンでは文字の名前は教えません。もし子供たちの中から「エス」という「文字の名前」が出てきたときには、文字の名前を知っていることをほめつつ、「文字には名前と音がそれぞれあり、単語を読んだり書いたりするときにはその音を使うんだよ」と補足します。（p.19）

各ページでは、見出しとしてまずその「文字/音」が大きく示され、手本を見ながらその「文字/音」を書いてみるコーナーや、ブレンディング（文字を１文字１文字音読みしながら単語として連続して発音していく訓練。arrow（矢）の場合、「ア・ゥル・オウ…アルオウ…アロウ」のような段階を踏む）のコーナー、単語を聞いて書き取るコーナーなど

から成る。その中に「おはなし」というコーナーがあり、この部分が、ターゲットとなる文字/音に楽しんで慣れ親しむための絵本になっている。本稿では特にこの部分を取り上げる。

分析例として、母音のa（音としては /æ/）を扱った「おはなし」を見てみよう。この絵本は、英語の読み書きを教える教材でありながら、(少なくとも日本語版においては）本文が日本語で書かれているという特徴がある：

> アニー（Annie）とアダム（Adam）はピクニックが大好きです［中略］。アニーは早速大きなかごを持ってきて、パンとジャムを入れます。アダムは大好物のリンゴ（apple）と飲み物、そしてカップケーキを入れます。「準備ができたよ！」と行って、さぁ、車でお出かけです。
>
> 4人は見晴らしのいい場所でピクニックを始めます。アニーはお母さんにジャムサンドイッチを作ります。アダムはリンゴを食べます。すると突然、アニーは腕がかゆくなってきます。腕を見ると、アリ（ants）が上がってきています！「a! a! アリだ！アリ、くすぐったい！ a! a! a!」と言いながら、アリを追い払います。［後略］
>
> **＊絵の中に示されているキーワード：**jam、hat、dad、rabbit、Annie、apple、Adam、ant

絵本といっても絵は各ストーリにつき1枚のみで、指導者はそれを児童に見せながら、上記のようなストーリーを語る。絵の中には、ターゲットとなる文字/音を使った単語がいくつか描き込まれ、その名前がキーワードとして吹き出し中に示されている。

2.2　音声学的特徴

こうした発音の訓練に特化して作られた教材絵本を音声学的特徴から分析してみると、フォニックスの習得という側面から見て、以下のような優れた性質を持っていることが分かる：

- 教員の適切な指導（「「f(/εf/) は /f/ と読む」ということに注目させる」「文字と音を結びつけて教える」など）が伴うことで、アルファベットが名称読みと音読みの両方を持つことが理解できる。
- ターゲットとなる文字/音（この場合f, a）を用いた単語が集中的に登場する（例：fox, furry, frog, funny; Annie, Adam, ants, a!)。そのため、児童に繰り返し聞く・発音する機会を与え、文中での音読みの発音 /f/ /æ/ に自然に慣れ親しむことができる。
- また、子音f /f/ で始まる多くの単語を同時に紹介することで、日本語の仮名綴り（フォ（fox, forest)、ファ（furry, funny, fun)、フェ（Ferris)、フィ（fish)、フ（Frank, frog, fly, full)）に関わらず同じ音（/f/）で始まることが理解でき、子音を「音」として自然

に認識させることができる。

・　２文字で１音の子音（例えばch /tʃ/）も、他の子音（例えばb, s, d）と同等に扱われている。そのため、chで１つの音であることが理解しやすい。

・　「おはなし」に登場するキーワードは全て閉音節である。そのため母音は、習得が期待されている音読みでしか発音されない（というより、aを音読みで発音する単語を集めたために、結果として閉音節のキーワードばかりになっている）。

このように、これらの教材では、用いる単語を厳選することによって、英語の発音のルールを明快に教え、かつ児童が自然に親しむことができるように工夫されている。

また、ルールが複雑な母音の発音については、児童の負担を少なくするため、段階的に導入する工夫が見られる。『はじめてのジョリーフォニックス』では、aは音読みの /æ/ のみと結びつけられ、名称読みの /eɪ/ とは一切結びつけられない。/eɪ/ はジョリーフォニックスにおいてはむしろ「aiの音」と呼ばれ、aiの文字/音を扱うページで学ぶ（rain, pain, snailなどの単語を用いて）。ティーチャーズブックの解説によれば、aを /eɪ/ とも発音する場合があることは、「その先の指導に向けて」という部分で補足的に扱われている。その解説は非常にシンプルで、「短母音で読んでみて知っている単語にならないときは、長母音で読んでみます」と記されているのみである（この場合の「短母音」は本稿の「音読み」、「長母音」は本稿の「名称読み」と同一）。例として、he, be, blind, mind, acorn, union, able, emu, itemといった単語が挙げられている。さらに「このルールは「マジックe」と呼ばれる綴りを説明するのにも役立ちます」として、late, theme, pipe, home, cubeの例も挙げられている。

英語の母音字の発音と音節の関係は児童には大変難しいため、このようにジョリーフォニックスでは、音読みと名称読みを同時に導入することを避けている。文字を音読みのみと先に結びつけさせるため、母音字を名称読みする単語は意図的に「おはなし」に登場させない。そして音読みが定着した後にはじめて、「aは /eɪ/ と読むこともある」「それはどのような場合か」と説明していく順序になっている。

このように、音と文字のつながりを確実に、段階的に教えるため、使う単語を大きく制限しているのがこれらの教材絵本の特徴である。そのことが絵本の意味内容に及ぼす影響については次節にみるが、その前に、これらの教材にはもちろん、長所だけでなく短所もあることを確認しておく。というのは、英語の文字/音（一般に母音・子音合わせて46の音があると言われる）の全てをこうした創作教材絵本で教えようとすると、文字/音と同じ数だけの種類のストーリーを考えねばならず、教材開発・教材研究に膨大な手間がかかる。また、それらのストーリー全てを扱っていると、「外国語」の想定する年間70単位時間の大半を使ってしまい、発音以外の言語活動（読む、書く、話す、聞く）が置き去りにされてしまう可能性もある。どの程度の時間を割いて教えるかには留意が必要である。

2.3　意味内容的特徴

次に、これらの絵本の内容を見てみよう。フォニックス教育に特化して作られた教材としての絵本は、その意味内容（つまりストーリー）的には、通常の絵本とは大きく異なる点が見られる：

- 通常の絵本に見られるような「起承転結」や「問題解決」の構造がなく、ストーリー性に欠ける。例えば田中（2017）においては、おそらく行1-3が「導入」あるいは「場面設定」、行4-5が「問題」（空腹という解決すべき問題の提示）に当たると考えられるが、行6で唐突に「解決」（お腹がいっぱいになる）が訪れてしまい、その解決がどう実現したかという一番の見せ場に対する描写が一切ない。絵本なので、本文ではなく絵でストーリーを語るという選択肢もあるが、この絵本の場合はそれも行われていない。そのため、児童がストーリーに興味を持って「先が知りたい」「もっと読みたい」「何度でも読みたい」という意欲を持つのが難しい。
- fox, forest, fish; jam, hat, dadなどのキーワードは、同じ文字/音を用いるという音声的共通性しかなく、意味的つながりがない。意味的つながりとは、同義関係、反義関係、全体-部分関係、その他のコロケーション関係（「ケーキ」と「食べる」、「青い」と「空」など、同時に使われることが多い単語間に生まれる関係）のことであり、意味のやり取りを第一目的とした通常の物語や会話中では自然に形成される。これらの繋がりが単語間にネットワークを生み出し、単なる単語の羅列を、実践的な使える知識に変える。しかし音声指導に特化した（ある意味、不自然でナンセンスな）ストーリー中では、そうしたネットワークが形成されにくい。

このように、絵本の目的がそもそも「ターゲットになる文字/音を用いた単語を登場させる」ことにあるため、どうしても物語作品としては完成度が低くなってしまう。

以上、2.2-3節に見たように、フォニックス習得のために特別に作られた教材絵本は、用いる単語を厳選することによって、特定の文字/音に慣れ親しませたり、逆に、既習のルールに合わない読みをする単語を避けて学習者の混乱を回避するという点で、教材として優れている。その分、使用できる単語が制限されるため、自由に物語を構成することができず、ストーリー性が犠牲になっているといえる。

3．市販の絵本を用いて読み書きを教える提案

前節に見たように、フォニックスを教える目的で作られた教材絵本は音声面で多くの利点を持っている。しかし同時に、その目的だけに選ばれた単語を用いなければならないため、①ストーリー性に欠ける、②導入される単語間に意味のつながりが薄い、③フォニックスを教えるために時間が取られすぎる、などの問題を生じていることも確認できた。特に1点目の問題は、児童の知的好奇心という点から強く改善が求められる。「外国語」を学ぶ小学校5-6年生といえば、日本語であれば充分に起承転結のある物語や簡単な小説が読

みこなせ、楽しめる年齢である。英語の文字と音を結び付ける目的のみに特化した絵本で知的好奇心を満たすことは難しい。膨大に出版されている市販の絵本の中から、内容的に児童の興味関心をそそるものを選択して活用できたら、学習動機はより高まるだろう。

そこで本節では、外国語教育のために意図して作られた絵本ではなく、読者を楽しませる本来の（authentic な）目的で作られた絵本、すなわち教材用ではない市販の絵本を、どのようにフォニックス教育に活用するか考える。今回は、小学校外国語教育の場で使われることが多い英語絵本の代表例として、Eric Carle の *The Very Hungry Caterpillar*（邦題『はらぺこあおむし』）を取り上げ、教材絵本と比べフォニックスの訓練には使用しにくい点（第 3.1 節）、フォニックス指導に用いるための教授法提案（第 3.2 節）を順に見ていく。

3.1　*The Very Hungry Caterpillar* のフォニックス教材としての課題

今回は 1 例として *The Very Hungry Caterpillar* を取り上げるが、この作品に限らず、市販の絵本はさまざまな「物語の面白さ」で児童を引きつける。しかし当然、教材としての使用は意図されていないため、フォニックス指導など特定の目的のためには、そのままでは利用しにくい。市販の絵本は使用する単語に制限がないため、特定の音を持つ単語が繰り返し使用される訳でもなく、また、フォニックスの（少なくとも初期の）ルールでは読みが説明できない単語も多く使用されるため、単に「一緒に読んでみましょう」では児童がついてこられず、学習効果は低い（場合によっては悪影響すらあるかもしれない）。例えば、*The Very Hungry Caterpillar* の冒頭部を見てみよう：

> In the light of the moon a little egg lay on a leaf.
> One Sunday morning the warm sun came up and—pop!—out of the egg came a tiny and very hungry caterpillar.
> He started to look for some food.

ここに示された単語だけ見ても、どの文字 / 音の練習になるという共通性もなく、また、黙字の gh を含む light、二重音字（母音字を複数重ねることで 1 つの母音を表す綴り）の ea を含む leaf などの単語が使われている。つまり読みに規則性がなく、児童にとっては発音を丸暗記するしかない。そこで本稿は、市販の絵本を最初から最後まで読めるようにするという指導方針は取らず、教員が意味を解説する読み聞かせによってストーリー全体を楽しみつつ、本文の一部分のみをピックアップして読み書き訓練に使う方法を提案する。

ここでは、以下の反復部を用いてみよう。第 3-8 見開きの本文である：

> On Monday he ate through one apple. But he was still hungry.
> On Tuesday he ate through two pears, but he was still hungry.

On Wednesday he ate through three plums, but he was still hungry.
On Thursday he ate through four strawberries, but he was still hungry.
On Friday he ate through five oranges, but he was still hungry.
On Saturday he ate through one piece of chocolate cake, one ice-cream cone,［中略］
and one slice of watermelon. That night he had a stomachache!

よく知られているように、絵本や物語には反復構造が多い。それがなぜ子どもに好まれるのか理由は説明できないが、子どもはお気に入りの絵本を繰り返し読むなど、未知のものに出会うより、「来るぞ来るぞ」と期待しているものが実際にやってくることに喜びを覚えるというのは、身近に知られた現象である。

この絵本の場合、あおむしが次々とたべものを食べる上記の場面が明確な反復構造になっており、「On曜日 he ate through 数字 たべもの, but he was still hungry.（～曜日にあおむしは～つの～を食べました。でもまだはらぺこです)」というフレーズが繰り返される。しかも変わっていく部分も、「曜日は順に次の日になっていく」「数字は１つずつ増えていく」「たべものは必ず果物である」という規則正しいルール（ただしオチとなる土曜日は例外）があり、その秩序が心地よいリズムを生み出している。こうした反復部は、リズムが心地よいだけでなく、同じフレーズが繰り返されるため、教師の見本に従って児童が発音してみるのが容易で、心理的負担なしに発音練習ができるという利点もある。

3.2 市販の絵本をフォニックス指導に用いるための枠組み提案

注意すべきは、ピックアップする部分が、児童に習得させたい英語の発音の基礎的な（かつ根幹的な）特徴をうまく児童に教えるような例を含んでいるかである。第２節に見た教材絵本の工夫も踏まえ、それらの特徴を以下の７つのルールとしてまとめる：

①英語のアルファベットは「名称読み」と「音読み」の両方の音を持つ
②単語の中では主に音読みで読まれる
③英語では、母音を伴わずに子音のみを発音することがある
④２つのアルファベットが１つの子音として読まれることがある（th, sh, ph, ch, wh など）
⑤母音は単語の中でも名称読みになったり音読みになったりする
⑥母音は、開音節（母音で終わる音節）においては名称読み、閉音節（母音の後に子音が続く音節）においては音読みで読まれる
⑦閉音節の最後にeがつくと、そのe（＝マジックe）自体は母音として発音されないが、音節中の母音が名称読みとなる

これら7つのルールをうまく教えるような単語を本文の中から選定し、もし（一部）見つからなければ教員が補足しつつ、絵本に親しみながら読み書き練習を行っていく必要がある。その場合の単語の選定法、指導法、補足する単語の探し方を、前節に挙げた*The Very Hungry Caterpillar*の反復部分（以下「反復部」）を例に用いて説明する：

① **「名称読み」と「音読み」の両方の音を知る練習→発音表を使って**

名称読みと音読みはフォニックス教育の基本である。絵本を用いるまでもなく、普段から表1や2のような発音表を教室に貼って何度も練習しておく。

② **単語の中では主に音読みで読む練習→発音表とブレンディングで**

①に見た発音表に従いさえすれば「本物の英語の本」が読めるという体験は、児童に大きな印象を与える。そのためにもぜひ、市販の絵本（一部であっても）を読ませたい。指導者に必要な準備は、本文の中から、（母音も含め）全て音読みで読める単語を探すことである。反復部では、on, but, still, hungryなどがそれに当たる。これらの単語を、①の発音表を指差しながら、1音ずつ発音してブレンディングしていく（例：「ア（実際にはアとオの中間音を発音）・ン…オン（on）」「バ・ア・トゥ…バットゥ（but）」「ス・トゥ・イ・ル…スティル（still）」のように）。この活動を通し児童は、発音表を使えば本当に英語が読めること、文中では音読みを使うことを学ぶ。

③ **母音を伴わずに子音のみを発音する練習→ブレンディングと子音で終わる単語を使って**

上記②のブレンディング練習時に、指導者が母音を伴わずに子音をうまく発音できていれば、音に敏感な年齢である児童は、子音のみを発音する英語の音構造を自然に習得するだろう。もう少し指導を明示的にしたければ、子音で終わる単語を探して練習するのも効果的である。反復部では、cake, chocolate, lollipopなどの単語がある。これらを「cakeは何の音で終わるかな？ /k/の音だね。/keɪki/じゃないね、/keɪk/だね」などと、母音で終わる日本語の発音（カタカナ発音）と対比させる形で提示することで、「単語が子音で終わる」すなわち「子音に母音が伴わない」ことがより明らかになる。

④ **2つのアルファベットを1つの子音として読む練習→2文字で1音の文字を他の1文字1音の子音と同じ枠組みで紹介**

読み書き練習で取り上げた本文に2文字で1音の子音が含まれていたら、その都度慣れさせていくと良い。特に同じ綴りが複数回出てくる場合は練習のチャンスである。反復部では、thで／θ／と発音する単語が、through, three, Thursdayと3つ登場する。その際、thで1つの音だと明確に教えるためには、1文字で1音の子音と同じ枠

組みで教えることが重要である。例えば、黒板に「□ree」と板書し、「□」の部分に「t」「f」「th」と書かれた紙を順に貼っていく。貼る紙が「t」だったら「/t/.../t/.../tri:/」、「f」だったら「/f/.../f/.../fri:/」、「th」だったら「/θ/.../θ/.../θri:/」と発音してみせることで、thがtやfと同じく1音を表すことがはっきりと伝わるだろう。

⑤　母音を単語の中で名称読みしたり音読みしたりする練習→同じ母音で異なる読み方になる単語を使って

名称読みと音読みの両方を教えたいターゲット母音があれば、同じ母音で異なる読み方になる単語を探すと教えやすい。例えばaをターゲットとするなら、反復部にはateとappleが見つかる。そのさい、①に挙げた発音表を用い、あらかじめ「aはどんな読み方があったかな？ /eɪ/ と /æ/ だね」と復習・確認しておくことが重要である。その後、それぞれの単語にaが含まれることを確認しつつ、「どちらの音で読むかな？」を当てさせる（ateは /eɪt/ で /eɪ/、appleは /æpl/ で /æ/）。その上で、「母音は単語の中でも2つの読み方をするんだね」と確認するのが効果的である。

⑥　母音は、開音節においては名称読み、閉音節においては音読みで読む練習→無理に音節の決まりを導入しない

上記⑤の練習において、「いつどちらの発音になるか」のルールまで教えるべきだろうか。音節の区切りの決まりは小学校児童には難しすぎ、かつ学習指導要領の範疇も超えていると考えられる。新小学校学習指導要領の「外国語」の章では、「読むこと」の目標は「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を、絵本などの中から識別する活動」とされている。つまり、単語は音から学ぶことが先で、音を知らない単語を初見で読めることが求められるわけではない。上記⑤の活動に照らして言えば、/eɪt/、/æpl/ と発音する単語があることを知っている前提で、ateが /eɪt/ の綴り、appleが /æpl/ の綴りであることに気付けられれば十分なのである。その意味で、綴りを見ただけで音節の切れ目がわかり、それに従って母音が正しく発音できるというところまでは、「外国語」の段階では求めないことが重要である。指導者は、名称読み、音読み、両方で読んでみて（ateを /æt/ /eɪt/、appleを /æpl/ /eɪple/）、「意味のある単語になる方で読もうね」などの指導にとどめることが肝要だろう。

⑦　閉音節の最後にeがつくと、そのe（＝マジックe）自体は母音として発音しないが、音節中の母音を名称読みする練習→eで終わる1音節の単語で

上記⑥のように、母音の発音と音節の関係は無理に導入する必要はないが、マジックeのルールは使用頻度の高さからも、余裕があれば紹介しておくと良いだろう。必要なのは、まず本文中からeで終わる1音節の単語を探すことである（反復部では、five,

slice, cake, pie, one, ate などが見つかる）。続いて、それらの単語が e を取っても児童が知っている単語になるか確かめる。five に対する fiv、slice に対する slic、cake に対する cak、pie に対する pi は全て意味をなす単語にならないため除外する。また、one /wʌn/ に対する on /ɑn/ のように、e を取ると全く発音が違ってしまう例も除外する。今回使えるのは、ate /eɪt/ と at /æt/ の組だろう。この場合も、同じ現象を含む他の単語組と同じ枠組みで導入すると理解がスムーズだろう。例えば黒板に「rat□」「hop□」「kit□」「tub□」「them□」「at□」などと板書し、「□」を手で隠して「これは /ræt/（ネズミ）、/hɑp/（跳ねる）、/kɪt/（道具）、/tʌb/（お風呂）、/ðɛm /（彼ら）だね」、「□」に e を書き加え、「こうすると、/reɪt/（割合）、/hoʊp/（願う）、/kaɪt/（凧）、/tju:b/（チューブ）、/ θ i:m/（テーマ）になるね」と確認する。その後、「at□」はどう発音するかな？□に e を入れると？」と確認する。この練習はさまざまな絵本で別の母音を対象にも行えるため、上記に示した「rat□」「hop□」「kit□」「tub□」「them□」の単語群は繰り返し使える例として記録しておくと良い。というのも、i）1 音節で、ii）語末に e がついてもつかなくても意味のある単語になり、iii）そのどちらも児童に馴染みのある（あるいは馴染んでほしいレベルの）単語である、という例は数が少なく、覚えておかないと咄嗟に実例が出ないからである。2 音節以上の単語では、語末の e がアクセントのある母音の発音に影響を与えないため、この練習からは除外する（例：apple, orange, chocolate）。

以上、市販の絵本 *The Very Hungry Caterpillar* の反復部分を例に用いて、小学生に必要な英語の読み書きルールを教える活動例とその教授法を提案した。これを実際にどの程度の絵本に応用することができるか、さらに検証の余地があると考える。

分析絵本

田中真紀子『キツネとカエル』（*Fox and Frog*）、田中『小学生に英語の読み書きをどう教えたらよいか』研究社 2017 年 p139 に収録

ジョリーラーニング社『はじめてのジョリーフォニックス』東京書籍 2017 年、ISBN：978-4-487-81032-1（スチューデントブック）、ISBN：978-4-487-81031-4（ティーチャーズブック）

Eric Carle. *The Very Hungry Caterpillar*. Philomel Books ボードブック版 2007 年、ISBN-10: 0399247459、ISBN-13: 978-0399247453

参考文献

大城 賢 編著『平成 29 年版 小学校 新学習指導要領ポイント総整理 外国語』東洋館 2017 年

田中 真紀子『小学生に英語の読み書きをどう教えたらよいか』研究社 2017 年

手島 良『これからの英語の文字指導――書きやすく読みやすく』研究社 2019 年

早川 知江a「小学校「外国語活動」と「外国語」: 共通教材としての絵本」『名古屋芸術大学教職センター紀要』第7号 2018年 pp. 39-52.

早川 知江b「英語の読み書きを教えるための絵本活用の妥当性――フォニックスの観点から――」『名古屋芸術大学教職センター紀要』第8号 2019年 pp.119-133.

早川 知江c「英語教材としての絵本と結束性――小学校「外国語活動」教材Let’s Try!の挿絵の分析――」『名古屋芸術大学研究紀要』第40巻 2019年 pp.233-246.

文部科学省「平成26年度 小学校外国語活動実施状況調査の結果（概要）」
http://www.mext.go.jp/componenenu/edut/a_mcation/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1362168_01.pdf. 2014年

文部科学省（2017年3月告示）『小学校学習指導要領』発行者：文部科学省

山下 佳世子「ジョリーフォニックスについて」
https://kayokoyamashita.com/archives/category/sp-synthetic_phonics/sp-about_jolly
（2020年2月11日閲覧）